

エディトリアル

沖縄地域医療支援センター センター長 崎原永作

病気の趨勢が、外傷や感染症などの急性疾患から、高血圧や糖尿病などいわゆる生活習慣病と言われる慢性疾患へと移ってきている昨今、医療は医療機関だけで完結できるはずはなく、それこそ地域全体で取り組まなければならない。身近な医療の玄関として、診療所は急病の初期段階に遭遇するところであり、生活習慣病を診るところであり、保健予防活動を展開する場であり、また、地域の包括ケアの中心的な役割を担う場所である。そして最近では医学生や研修医の地域実習の場としても大きな役割を果たしてきている。こうした多岐にわたる診療所活動は、治療介入が最優先される救急疾患は別として、患者さんの性別・年齢や家族構成、地域の文化的背景などに育まれた多彩な価値観にそった個別的な対応にならざるを得ない。

今回の特集企画「私の診療スタイル -心に残る症例とその教訓-」は、これまで地域の人々に寄り添った独自の診療活動を実践されている先生方に、ご自身の診療で大切にしていること、これまで自身で経験された興味深いエピソードを紹介していただいた。

慢性疾患を単なる病気として診るのではなく、それぞれの人生の中の物語としての意味付けにまで深く分け入り、理解し、共感することができなければ、行動変容の動機付けにつなげることはできないと語る松岡史彦先生、総合医として地域に出た時に、その必要性を痛感した小児一次救急を総合医が効率よく、求められるスキルを網羅して習得できるプログラムの普及に務めた土肥直樹先生、在宅看取りを通して、人生の終末期に交錯する本人と家族のそれぞれの物語がぶつかり合わないよう注意深く調整し、最後の瞬間までその人らしく生きさせてもらうことを願う岡本静子先生、身近な肉親の死を自身の医療の出発点として、全ての人々が安心して住み慣れた地域で安心して人生を全うできる「地域まるごとケア」体制を提唱する花戸貴司先生、そんな地域づくりの一例としてつるカフェという在宅医療に関わる多職種に行政と市民を加えた勉強会を立ち上げ、市民全体で、病も障害も死までも織り込まれた「生」を支える地域の実現を目指している鶴岡優子先生、「医食農脳動同源」をモットーに地元の野菜・果物の活用を勧め、野菜の苗を配布することによって、患者さんの食生活の改善を勧めている石川清和先生、医学教育の場として診療所を位置付け、医学教育を通して指導者および学習者が双方向性にプロフェッショナルリズムについてのポジティブな学びの刺激を受け取り合えることを教育者としての喜びとした廣田俊夫先生、今回執筆をお願いした先生方は、患者そして地域と真剣に向き合い、その体験を通して得た教訓・気づきを自身の診療活動の軸として実践している。その中で患者一人ひとりの価値観に沿ったキメの細かいオーダーメイドの医療から地域全体を視野に入れたマクロの医療まで、それぞれ独自の診療スタイルを確立している。本企画で皆様の診療活動がより充実することを期待したい。